

学校までっ走れ

高知・子どもと教師の文学の会/編

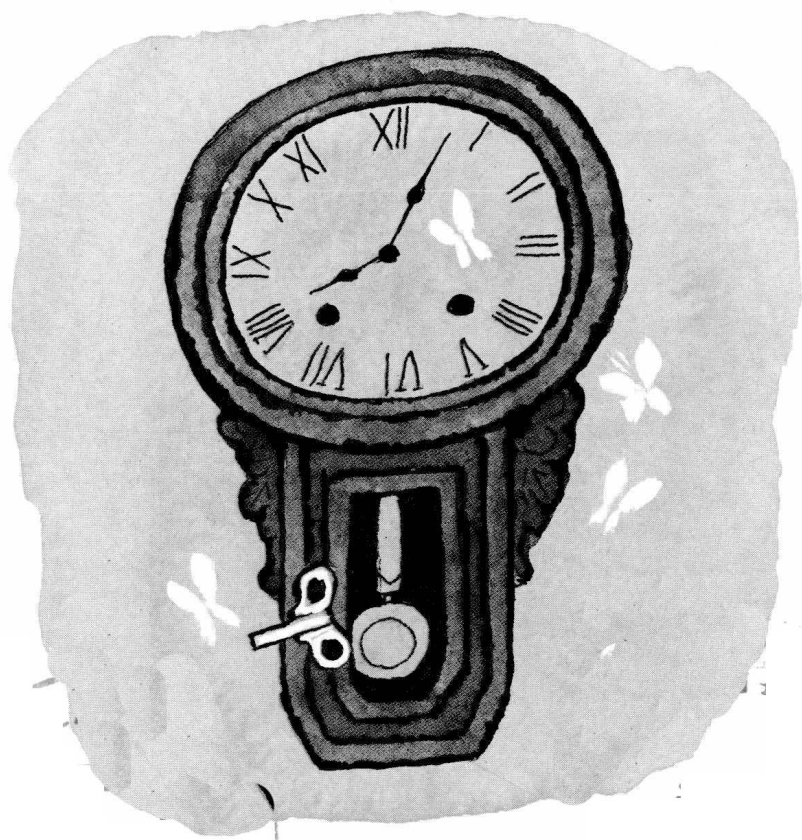
若菜 珪/絵



学校までっ走れ

高知・子どもと教師の文学の会/編

若菜 珪/絵



高知・子どもと教師の文学の会／編

学校までつつ走れ

ポプラ社 昭和54 (1979)

166p 22cm (先生のとっておきの話 26)

〔分類〕 918

学校までつつ走れ

検印省略

先生のとっておきの話 26 〈高知編〉

定価 780円

高知・子どもと教師の文学の会／編

高知市追手前 2-1-12 追手前小学校図書館内

高知県学校図書館協議会事務局 川村幸子宛

昭和54年10月 第1刷©

発行者 久保田忠夫

発行所 ポプラ社

〒160 東京都新宿区須賀町5

振替 東京4-149271

印刷所 新興印刷製本株式会社

製本所 大成紙工業所

落丁本・乱丁本はいつでもおとりかえいたします。

8095-056026-7764

はじめに

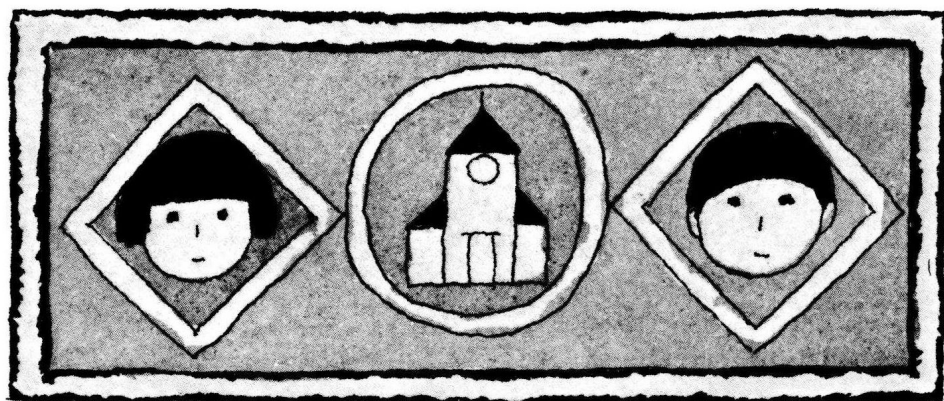
「先生のとっておきの話」〈高知編〉が、土佐の地に誕生しました。

心のあたたまる話、思わずプツと、ふきだし笑いたくなる話、なみだがジーンとこみあげてくる話、そして戦争中の体験の話など、先生の胸の中に、そっとしまっていた、とっておきの話、七編をおさめました。

この本とのであいによって、心のふれあいを深めるとともに、みなさんの心をより豊かに育ててくれることでしょう。

さあ、みなさん、読んでください。

くみた
汲田 精一
せいいち



もくじ

はじめに 1

馬の雨ガッパ 6

青いあさがお 28

先生のひきだしがあやしい 52

リッペさんにはくしゅを！ 70

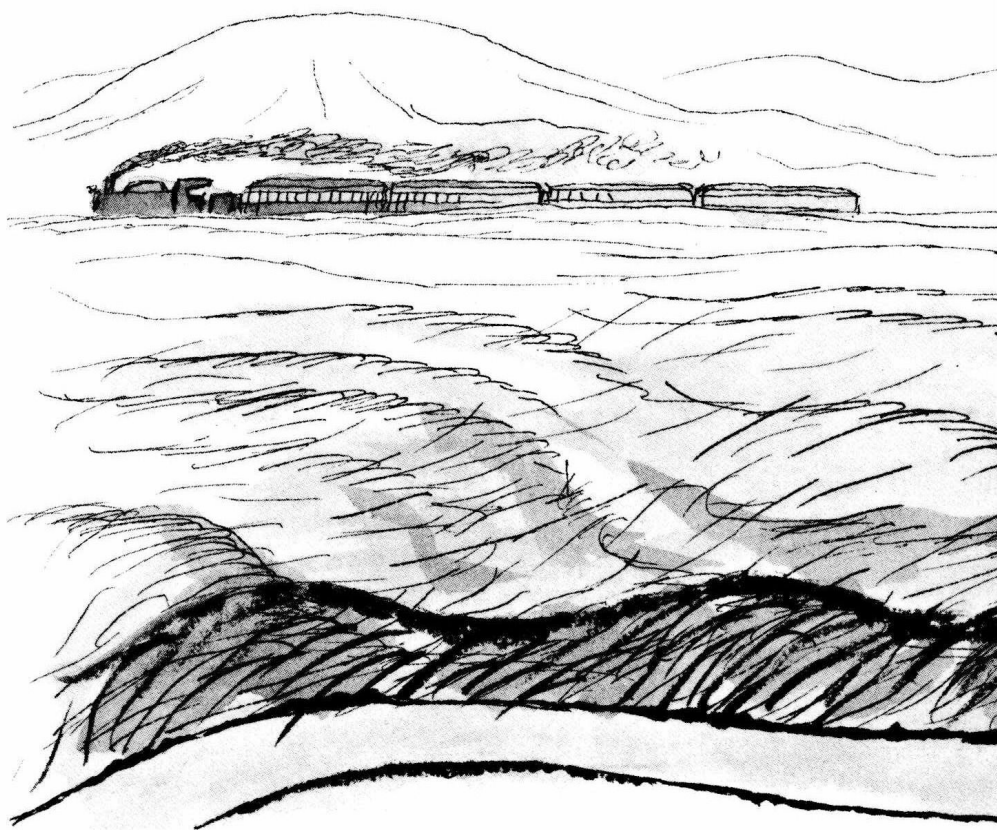
うさぎさんごめんなさい 94

白もくれんの咲くころ 119

学校までつつ走れ 139

あとがき 164





編集委員

高知県学校図書館協議会事務局

川村 幸子

高知童話を書く会会長

窪田善太郎

高知県学校図書館協議会会長

汲田 精一

児童文学者

代田 昇

高知県学校図書館協議会事務局長

高島 恒義

画家紹介

若菜 珪 1921年埼玉県に生まれる。多摩美の図案科を卒業。作品には「ききみみずきん」「馬良の神筆」など多数がある。

現住所 大宮市堀の内2-518

学校までっ走れ

高知・子どもと教師の文学の会/編

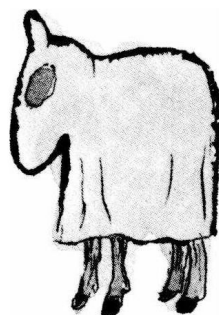
若菜 珪/絵



馬の雨ガッパ

やまわき
山脇

てるこ
映子



—

「ひろちゃん、どうぞ。イチゴ水ができました。」

コップをさしだすみや子さんの指は、べっとりあさがおの赤いしるでそまっています。

「ありがとう。」

ひろ子が、コップを口に持っていこうとしたそのときです。

ヒューン

「おちるぞうっ。にげろっ。」

さけび声とぶきみな音に、はっとしてひろ子は空を見あげました。

オレンジ色の火花をちらしながら、十こ、いや、二十こ、たくさんのはくだんがひろ子の頭めがけて、ぐんぐんせまってくるのです。

「あ、あつ。どうしよう。」

ズ　ズーン　ドカーン

まっ赤な火ばしらが、ドーンと天にまいあがったと思ったとき、ひろ子はガバツとはねおきていました。

「ああ、また、いやな夢を見てしもうた。」

胸^{むね}が、まだ、ドクドクと、なっています。

みや子さんと遊んだのはちょうど一月前のあの日、七月四日……。その夜のとうぜんの空^{くう}しゅうで、ひろ子の家は雨のようにふってくるしょういだんをうけて、メラメラともえてしまったのです。

ひろ子は、父と母のあとについてひっしでにげました。ほのおにつつまれた町すじを、川へむけて走りました。ただ、走って走って、走りとおしました。赤いほのおのしたさがベロベラと、なめついてくるのです。

ちらっと、たった一度ふり返った、ひろ子の目にうつったのは、頭からもえさ

かっているにわの木たちの、ものすごいすがたでした。

八月十五日。戦争は終わったけれど、あのひろ子のうちはもうありません。やけてしまったのです。

そして、遠いみよりをたよって、ひろ子たち親子は、この宗安寺村にやってきました。それから親子三人で、こうして谷間の家に住むようになったのです。

静かな山の夜です。

ジュビル ブル ビル ジュボル ブル ビル

谷川は、ひろ子をなぐさめるように、いつもの子守歌をうたって聞かせてくれました。

二

もう八月もきょうでおしまいです。

あしたから学校がはじまります。

おとうさんは、ここから五キロメートルほどはなれた町の学校へ、転校の手つづきをとりました。ひろ子はあした、ふた月ぶりで学校へ行くのです。新しい学

校は、朝倉あさくら小学校といたしました。この学校の三年生になるのです。

「ひろ子、ひろ子。」

おかあさんがよんでいます。

「おかあちゃん、ちょっと公会堂こうかいどうへ行ってくるが、ひろ子もいっしょに行かんかね。」

公会堂は、村の人たちがよりあいをするところです。

「公会堂へ何しに行くが。」

「配給はいきゅうがきちゅうと、ついでに、おうしばあちゃんく（ばあちゃんのところ）へ行て、うんとおいしいカボチャをかうてどうか。」

「うん。」

ひろ子の返事は、元気がありません。

ひろ子は、このごろ、からだがよわっていました。食べるものが十分じゅうぶんにないのです。町へ行っても、食べるものをかうことができません。空しゅうで町の店もやけてしまいました。やけのこったお店へ行っても、もうかうものはあまりありません。

ひろ子のおかあさんは、村の中をあちこちたのんでまわっては、カボチャやお
いもを少しずつ、わけてもらうのでした。

ひろ子は青い顔をして、いつもグズグズしていました。おかあさんはそれがと
ても心配しんぱいでした。

ひろ子とおかあさんは、つれだって山をおりました。おかあさんは背中せなかに、大
きなリュックサックを背おっています。そのリュックサックは、おかあさんが自
分のおびをほどいてぬいあげたものです。ところどころに、白く松まつのようがう
いて見えました。

おかあさんはときどき、ひろ子の方をふり返っては歩いていきます。すずしい
山の風が、サーッとひとふきくると、くずのはがヒラヒラと、はうらを見せて、
山一面銀いちめんぎんのさざ波なみが立ちました。ひろ子はトコトコ、おかあさんのあとについて
山をおりていきます。

公会堂には、もうたくさんの方が集まっていました。ひろ子たちのように、戦せん
争そうでやけだされた人たちも、何人かきていました。どの人もよれよれのモンペを
はいて、つかれたような顔をしています。

公会堂のゆかの上には、いろいろなものがならんでいました。まっ赤なブラウスから、上着^{うわぎ}、ズボン、もよういりのハンカチもあります。たばこや塩^{しお}などもありました。どれも家族の人数によって、わりあてがきまっていました。たばこをもっとすいたい、塩がもっとほしいと思っても、わりあていじょうにもらうことはできません。

塩やたばこをはかってもらった人は、だいじそうに、それをふくろにいれていきます。

「りさいしゃ手ちょう(戦争で家をやかれた人、というしょうめい書)を持っている人は、こっちへきてください。」

村のおじさんが、大きな声でいいました。

何人かの人、ドヤドヤ、そっちの方へ集まりました。おかあさんも行ききました。ひろ子もそのあとについて行ってみました。

「しんちゅう軍のはらいさげ物資^{ぶつし}です。あんまりよけありませんから、ひとりがひとつ、えらんでみてください。」

おじさんがそういうと、まわりの人たちは、ゆかの上のしな物にどっととびつ

きました。

「つたやん、こりゃ、おまんにぼっちり（ちょうど）ぜよ。」

「かしてみや。」

つたやんは、男の人から上着をとると、手をおしてみます。

「まこと、ぼっちりじゃ。手がでんぜよ。」

つたやんは両手をタランとたらずと、かかしのようにつつ立って、わざと手をフラフラふってみせました。

「ワッハッハッハッ。」

ひさしぶりに、明るいわらい声がおこりました。

つたやんは両そでをおり返すと、ほんとうにちょうどになりました。上着をかかえると、にこにこ顔で帰って行きました。

おかあさんは、つと手をのばして、大きなゴムの雨ガッパのようなものを取りました。だれもとろうとしないので、わきへのけてあったものです。おかあさんは、おうど色のゴムのカッパを、あちこち、ひっくり返して考えこんでいましたが、心をきめたように、それをおじさんにさしました。



「これ、もらえるでしょうか。」

村のおじさんは、おかあさんがゴムのカップを手に持っているのを見ると、

「おまさん（おまえさん）、なかなかいいものを見つけた。」

といってほめました。けれども、ひろ子は目をまるくしておかあさんを見ていました。

カップはカップでも、人間の着るカップではありません。それは馬の雨ガッパでした。頭は馬の頭がはいるように細長く、目のあながまるくくりぬいてありました。馬の背中^{せなか}にかける、とても大きな雨ガッパでした。

ひろ子は前に、兵隊さん^{へいたい}が馬にこんな雨ガッパを着せて、雨の中を歩いていたのを見たことがあります。でも、うちには、馬どころか、ねこの子一匹いません。おかあさんはどうしようというのでしょうか。

リュックサックは、馬のカップをつめこんだので、まんまるくふくれあがりました。

公会堂をでるなり、ひろ子はおかあさんに聞きました。

「おかあちゃん、馬のカップを買ってどうするが。」